なぜ我々は研究するのか?

巻頭言

吉　森　　保*

Why do we investigate?

Key Words：Frontier Biosciences, Basic Science, Intellectual Curiosity

この春に大阪大学生命機能研究科長を拝命して最初の仕事が、受験者向けのパンフレットに当研究科を紹介する文章を書くことであった。そのおりにこれまで漠然と考えてきた研究とは何かということについて、自分なりに整理することができた。我々生命機能研究科の場合は、生命のしくみが研究対象となる。もちろん研究には病気を治すための研究や災害から社会を守るための研究、生活をより良くするための研究もあるが、当研究科では知的好奇心に基づき未知なる生命現象を「研ぎ澄まし究めること」つまりは本質を理解することを目指している。生命という大いなる謎に対して、なぜ？どうなっているのか？という根源的な問いかけを行ういわゆる基礎研究の場ということになる。

ここ何年か日本からノーベル賞が次々と出て喜ばしい限りである。個人的なことで恐縮だが私は、2016年ノーベル生理学医学賞を受賞された大隅良典博士（現東京工業大学栄誉教授）が国立基礎生物学研究所で研究室を立ち上げられたときに助教授として呼んで頂き、オートファジーと言う細胞機能の分子機構の解明を共に行い分野を切り拓いてきた。その大隅博士が以前から常々言われてきたことが「役に立つか立たないかわからない研究が尊い。」ということである。私も全く同感であり、研究という知の地平における探検では、役立つかどうかに捕らわれていると道は拓けないと考えている。そして役に立つかどうかわからないが真理を探究した研究から大きな発見が生まれ、本当に役立つ技術が導かれる。大隅博士や私の研究対象であるオートファジーは今、多くの疾患を抑制していることが判り医学的応用が期待されている。大隅博士による酵母のオートファジー遺伝子群の発見というブレイクスルーがあったからこその展開であるが、当初は予想もされていなかったし、我々も応用のことなど考えずにひたすらオートファジーの仕組みの解明に取り組んでいたのである。

人間性に深く根ざす、知りたいという欲求を原動力とする研究活動＝科学は、文化であり人類共通の財産である。我々人類は数千年に亘って営々とひとつずつ発見を積み上げ、壮大な知の伽藍を築き上げてきた。それは目に見えないサグラダファミリアであり、未完成の美しくも厳かな大建築だ。そこには役に立つかどうかを超えた価値がある。ひとりが積む煉瓦は小さいが、科学の総体を見渡すとき悦びは大きい。そしてその悦びは、研究者だけのものでは無く全ての人のものでなければならない。すぐには役に立たない研究を一般市民が文化として理解し支援してくれなければ、基礎研究は成立しない。同じ文化でも、芸術やスポーツと異なり科学は発見の喜びを伝えるのが難しい。しかしそれを伝えるのもまた研究者の責務であり、生命機能研究科も専門外の全ての人々に我々がどのような研究を行っていてどのような発見があったのかその面白さを熱く語っていかなければならないと強く思う次第である。

* Tamotsu YOSHIMORI
1958年9月生まれ
大阪大学大学院医学研究科博士課程中退（1986年）
現在、大阪大学大学院　生命機能研究科
生命機能研究科長　栄誉教授
医学博士　細胞生物学
TEL：06-6879-3580
FAX：06-6879-3589
E-mail：tamyoshi@fbs.osaka-u.ac.jp